



Title	初期ルカーチにおける内在と超越の問題：ハイデルベルク美学論稿研究序説 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	秋元, 由裕
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12504号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/65735">http://hdl.handle.net/2115/65735</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yusuke_Akimoto_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 秋 元 由 裕

審査委員	主査	教 授	藏田伸雄
	副査	准教授	田口茂
	副査	特任教授	山田貞三
	副査	名誉教授	高幣秀知（北海道大学）

## 学位論文題名

初期ルカーチにおける内在と超越の問題

—ハイデルベルク美学論稿研究序説—

本論文はルカーチ・ジェルジュ Lukács György (1885-1971) の『ハイデルベルク美学論稿』(1916-18) を中心的題材として、その思想史的意義を『歴史と階級意識』との関連において明らかにしようとする試みである。本論文はルカーチの『芸術の哲学』(1912-14) から『美学論稿』への改稿プロセスの検討を通じて、『美学論稿』が『歴史と階級意識』の思想と、その物象化批判の議論を準備したことを示そうとする。さらに秋元氏は〈未在のものへの目的論〉という概念を軸にして、ルカーチの物象化批判はヘーゲル的目的論とは異なるものとして理解されるべきだと主張している。また秋元氏は本論文で、芸術作品のうちに体験的現実からの救済領域を求める『芸術の哲学』での「ユートピア主義」から、主体性の解放過程としての美学の現象学へと至ることが『美学論稿』に見出されることを示すことを試みている。さらに本論文では『美学論稿』では美的創造と受容の問題として語られていることを、現実変革の問題として捉え直すという意図がルカーチにあったことを示すことが試みられている。これらの試みは本論文では一定の成功を収めていると言ってよい。

そして本論文では「同一的な主体－客体」という概念は『美学論稿』に由来するものであり、ルカーチの思想形成過程を理解する上で『美学論稿』は不可欠な題材であることを示すことにも成功している。

さらに秋元氏は『美学論稿』の思想に照らして『歴史と階級意識』を再解釈することによって、ルカーチの物象化批判を他律的な目的論だと批判するのは不当であることを示そうとする。さらに秋元氏は「美学の現象学」から『歴史と階級意識』に至る思想的展開の中に読み取られる〈未在のもの〉という思想と「内在と超越」という視点は、本質主義を回避しつつ同時に批判のための準拠点となるものであり、現代の社会哲学にとって、大きな意義を有することを示すことも試みている。

またルカーチは一貫して、美的領域においてのみ「主体・客体の同一性」が成立することを強調しており、この点では『芸術の哲学』も『美学論稿』も、そして『歴史と階級意識』も同様である。しかしその「同一性」の意義や、物象化批判における美的なものの意義の捉え方という点では、それぞれの著作は異なっている。本論文の中心課題の一つは、この差異をルカーチの思想形成過程に即して明らかにすることであるが、その課題は十分に果たされていると言ってよい。

またルカーチの「美学の現象学」においては物象化された既成の現実連関を打破しようとする志向が働いているが、美学の主体概念はそのままでは社会的・歴史的現実の領域に直接転用することはできない。秋元氏は美的価値を到達目標とする美学の現象学が「未在のものへの目的論」を志向する「現象学」へと再編され、それが脱美学化された地点に『歴史と階級意識』が位置しているという解釈を示しており、この解釈には説得力がある。

本論文は今まで顧みられることの少なかったルカーチの『美学論稿』を緻密に読み解き、「未在のものへの目的論」という独自の解釈視点によって『美学論稿』と『歴史と階級意識』との相違と連続性を明らかにしており、その思想史研究上の意義は大きい。また本研究はルカーチの思想、特に

その物象化論と疎外論を目的論の規範性批判という明確な視点から統一的に理解することを可能にしている。さらに本研究はルカーチ研究としての意義だけでなく、ヘーゲルの『精神現象学』の目的論の評価と理解、またルカーチ思想とマルクスの『パリ手稿』での思想との類似性の検討など、単なるルカーチ研究に留まらない、哲学史的・社会思想史的視野のもとで書かれている。その射程は大きく、その哲学史研究上の意義も大きい。また本論文にはヘーゲルの目的論とマルクス主義の全体を問い直すという遠大かつ野心的な意図も感じられる。

もっとも、本論文の鍵概念である「内在と超越」の統一的理解が必ずしも明確ではなく、『美学論稿』と『歴史と階級意識』の物象化論との積極的連関について十分に書かれていないことなど、本論文に問題点がないとは言えない。しかし、それは秋元氏の今後の研究上の課題であり、このような問題点は本論文の価値を些かも損なうものではない。

以上の審査結果に基づき、本論文審査委員会は全員一致で本論文は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと判断した。